

榎茂都陸平の新舞踊〔I〕

大正6(1917) — 昭和6(1931)

桑原和美

序

本研究は、日本の新舞踊に先駆的役割を果たした舞踊家・榎茂都陸平(1897—1985)の活動と作品の特色について、彼が宝塚少女歌劇団(以下「宝塚」とする)において振付を始めた大正6年から昭和6年に欧米視察に出掛けるまでの14年間に焦点を絞って考察するものである。

この時代は、ヨーロッパを中心に起こった新しい舞踊思潮の影響を受けて、とりわけ古典舞踊家達の間で、従来の舞踊技術を基盤としながら、より人間の内面的な感情を表現しようとする所謂「新舞踊」が活況を呈した。その中でも榎茂都の活動と思考の先駆性、革新性は特に注目すべきものであった。彼が「宝塚」で舞踊教師兼振付師として生徒の指導に当たり、また大正10年には「春から秋へ」の発表によって新舞踊運動に先鞭をつけたことは周知の事実である。しかしながら彼の舞踊思想、舞踊に関する知識や理解、また多様な作品や活動に対する一般の認識、評価は決して十分なものとは言えない。

本稿では、小冊子『榎茂都陸平の歩み』(非売品)、雑誌『歌劇』、榎茂都自筆の舞踊譜『春から秋へ』を主な資料として、まず14年間の活動と宝塚での発表作品を概観し、次いで「春から秋へ」を例にとり彼の新舞踊の内容や特色を考察する。

I. 活動と作品

榎茂都(本名:鷺谷)陸平は1897(明治30)年に、上方舞榎茂都流の二世扇性の継嗣として生まれ、幼少から舞の稽古を始めて三歳で初舞台を踏む。1917年4月から「宝塚」の教師となり、同年10月に処女作「屋島物語」を発表した。長唄「八島官女」にヒントを得たこの作品で彼は早くもオーケストラによる西洋音楽を用い、また海女や漁師の群舞を振付けている。更に第二作目「羅浮仙」の第二場“梅林”の鶯の踊りには、西洋舞踊のテクニックを採り入れたとされる。^①

14年間に榎茂都が歌劇団のために振付けた作品は、歌劇、お伽歌劇、舞踊、バレエ、レヴュー等の分野に亘る。^②そしてその中で最初の純舞踊作品として発表されたのが「春から秋へ」であった。この作品の前年、大正9年には藤蔭会第8回公演において新舞踊「浅茅ヶ宿」が上演され、また市川猿之助の“春秋座”も結成されている。そして大正10年は、榎茂都の「春から秋へ」(3月)、藤

蔭会の「思凡」(5月)、春秋座の「虫」(11月)が発表されたまさしく新舞踊勃興の記念すべき年であった。

バレエとして発表された榎茂都の作品には、「アルルの女」「夜討」「牧神の午後」「裸山の一夜」などがあるが、いづれも正式のバレエテクニックに基づいていたとは言い難く、むしろダルクローズのリトミックやドイツ表現主義舞踊の影響が窺われる作品が多かったと言える。

「春から秋へ」の発表後、榎茂都は一度「宝塚」を退き、大阪松竹楽劇部の創設に加わるが、芸術理念を追求する彼と会社の経営理念との相違が原因となって、約2年後に再び「宝塚」に復帰している。そして翌年の大正13年に、「宝塚」での仕事と平行して、自己の新舞踊の自由な研究、発表の為の機関として「榎茂都舞踊研究所」を設立し、独自の理念に基づいた教育を開始する。ここではバレエ、リトミック、日本舞踊、邦楽、美学、英語等が教授され、理論と実技に亘る、特にダルクローズシステムによるリトミックに重点を置いた教育は、当時としては他に類のないものであったと言い得よう。

昭和2年には初めての著作『子供の為の舞踊・第一輯』『同・第二輯』^③が出版された。二巻組で各々わずか49頁たらずのこの本は、「研究中の自分としては之れも一つの習作」^④と記されているように、彼が自らの舞踊に対する姿勢を表明した細やかな一歩と見るに相応しい。その“序”において彼は、子供が生来持っている身体運動の欲求、リズム本能を誘い出すような芸術教育としての舞踊がおこなわれるべきである、と理想を述べ、ダルクローズ、ラバン、ウィグマンらによる舞踊教育への賛同を示している。

しかし、こうした榎茂都の理想を追求しようとした行動は、父扇性の病、そして死という現実によって突然のように中止の已む無きに至る。榎茂都舞踊研究所は昭和2年10月30日をもって閉鎖され、翌年に彼は榎茂都流三世家元を継承する。この時から彼の新舞踊の理念は、再び「宝塚」という、大きな援助と同時にある限られた条件をもつ場において形象化が試みられることになった。

この時期、「宝塚」は演出家の岸田辰弥、白井鐵造、音楽家の高木和夫他、スタッフを次々と欧米留学に送り出し、帰国後の彼等は例えば岸田の「モン・パリ」のように大きなヒット作を生み出していた。また舞踊の世界では、石井漢が欧州公演旅行から帰国、藤蔭静枝の渡仏、サカロフ夫妻やルース・ページの来演等、海外との往来が次第に盛んになっていた。そうした状況の中で榎茂都は、所謂日本舞踊の伝統的な在り方に固執するばかりで、変革に消極的な舞踊家達の態度に強く批判的な考えを述べ、より広い舞踊の本質に視線を

向け、海外の異なる舞踊形式にも理解を示すべきであると主調している。そしてまた、単に表面的な理念の追従に留まらず、具体性のある方法論をもつことこそが、新舞踊が新しい局面を切り開くために必要であるとし、自らがその方法を模索している最中にあると述べている。

Ⅱ. 新舞踊「春から秋へ」

現在、榎茂都陸平による新舞踊のうち20作品以上の舞踊譜が残されている。本研究では、それらの中で最も古い作品であって、しかも作品の概要や衣裳、作品の具体的な運び等、全般に亘る記述が鮮明であり、さらにまた彼の作品として良く知られる代表作であるという理由から、「春から秋へ」をとり上げ、考察の対象とした。

作品の初演は、大正10年3月20日から5月20日の宝塚少女歌劇春期公演で、同年6月には東京の帝国劇場で再演された。「春の暁より秋の黄昏に至る」時の移ろいに重ね合わせて描かれる虫たちの生涯をテーマとするこの作品は、同年に市川猿之助が発表した「虫」と類似する点が多かった為に話題を呼び、しばしば比較された。小寺融吉はこう述べている。「一言で云へば(“虫”)は本質の問題、根本の哲学に触れないといふことである。……私は世に名声噴噴たる“虫”よりも、榎茂都陸平氏の“春から秋へ”を高く買ふ。前者には詩がない。後者には詩がある。前者には虫の生活の外的模倣があったが、後者にはそれ以上の虫の心の世界が表現された。此の二つは根本のものでなくてはならない。」⁹⁾

「大正十年三月拾九日型附清記。全年五月廿八日改修清記」と最終頁に記された舞踊譜帳によれば、この作品は全一幕、四段から成る23分間の作品で、構想及び振付・榎茂都陸平、作曲・原田潤。踊り手は主演の白と黄の蝶各1,他に白い蝶7,黄色い蝶7の計16名であった。衣裳は、蝶の姿をモチーフに、背中の中央には蝶の羽を模した布を付け、頭には触覚に見立てた2本の角を立てている。上着は着物のような重ね衿で、袖は肩から肘にかけて広がったデザインである。そして腰には細い帯を結んでいる。また足にバレエシューズのような靴をはいているが、衣裳全体の印象は舞楽の影響が強く感じられる。具体的な照明案は指示されていないが、「梗概」に描かれている「徐徐として梢にさしかかった朝日の強い照光」「春日の淡い光線がやや強烈な白色を帯びて来ます」「夏の日益々強く」などの箇所は、照明の効果によって表現されるように考案されていたと推察される。

記譜方法に関しては、言葉による記述を主にしながら、踊り手の位置や移動の軌跡を表わす線と記号(例:○△□),動作やポーズの簡単な描写が言葉を補うように用いられている。またその言

葉からは、榎茂都流独自の動作を含む日本舞踊の振りだけでなく、バレエや舞楽などの舞踊技術が採用されていたことがわかる。記譜は、音楽の小節のように、主旋律を奏でる楽器、あるいは特徴のある音の変化(例:ワルツ,トレモロ)を目安にした、ある長さのまとまりで一応区切られているが、楽譜が今のところ見つからない為、実際の音楽と動作の関係は不明である。音楽について知ることのできるの、コルネット、ホルン、オーボエ、クラリネット、セロ、ビオラ、フルート、コントラバス、ヴァイオリン(第1,2)から編成された小規模のオーケストラによるシンフォニーであったということである。

最後に、「春から秋へ」が当時の舞踊として、どのような点で改新的な新しさを持っていたかを簡略に述べることにする。

まず第一に、この作品が舞踊家(振付者)の構想に基づいて、振り、音楽、衣裳、装置、照明等が統一性をもった総合芸術を意図して製作された点を指摘できる。同時代に藤蔭静枝が、和田や福地等の“モルモット”と自他共に認める状況であったことと比べても、榎茂都の主導性は鮮明であると言えよう。次に、歌詞を伴わない西洋音楽のシンフォニーに対して振付を行った点が挙げられる。市川猿之助、藤蔭静枝等も新舞踊における音楽の改革を最重要課題としていたが、邦楽中心のいわば合いの手で組み立てられた音楽に留まっていたことに比べて、遥かに大胆な試みであった。そして第三点として、日本舞踊を基本にはしていたが、バレエや舞楽といった全く異なる様式の舞踊技術を融合させるように用い、また群舞の振付を行うなどの、動作に関する冒険的な試みは、大いに注目されるべきものであった。

この作品におけるこうした試みが、以後の榎茂都に新舞踊の理念と方法を更に探究するという課題意識を強めさせ、また他の新舞踊家に対しては、具体的な種々の示唆を与えたであろうことは疑問の余地がない。

註)

- ①榎茂都陸平『舞踊への招待』昭33,全音楽譜出版社,55頁
- ②具体的な作品名等については学会発表配布資料参照
- ③昭2年9月,榎茂都舞踊協会発行
- ④同書,5頁
- ⑤『演芸画報』大正11年1月

本研究に際して、貴重な資料をお貸し下さるなど多大な御助力をいただいた鷺谷七菜子氏に、この場を借りて心からお礼を申し上げます。

附)本研究の詳細は、「就実女子大学一般教育・研究年報」第11号(1994)に掲載された。